

【目的】高校生の母子間を適応4タイプに分類し（適応・擬似適応・擬似不適応・不適応型）、関係のきわめて良好な適応型と不良な不適応型に注目して、適応・不適応と相関する要因を分析する。

【方法】1979年1月に、神奈川県立高校1・2年生の母子約1000組を対象に、1～2週間の留め置き法による調査を実施した。有効票は756組（男348組、女408組）であった。

【結果】①適応タイプの分類構成比は、子評価では適応型55.0%、不適応型21.6%、その他23.4%、母親評価では適応型68.4%、不適応型15.2%、その他16.4%であった。一般に母子関係は良好であるが、子評価で又割強すなわち5人に1人が不適応型であることも無視できない。また、適応型の比率は母の方が高く、不適応型とその他はいずれも母の方が低い。母は関係を“良く”認知する傾向がある。②過去の生育歴における支配度、子に対する干渉度および夫婦関係のあり方（夫婦の連合度、夫の権威—女子のみ—、妻の権威—男子のみ—）が、適応・不適応と相関する要因であることが明らかになった。生育歴の支配度や夫婦関係は直接適応・不適応とはかわるのではなく、何らかの媒介変数が働いていることが予想される。それを干渉度と仮定して分析した結果、支配度と夫婦の連合度（女子のみ）については、干渉度を媒介として相関していることが明らかになった。夫婦の連合度（男子）、夫の権威、妻の権威については別の媒介変数が関係していることになるが、それを見出すことは今後の課題である。

注 夫婦の連合度：子の前で夫の悪口を言う頻度が高い程連合度は低い。